



第四話 ボス猫

きょうはボス猫の話です。といってもぼくが会ったのではなく、イタチのフクスケから聞いた話です。本名はわかりません。まあ聞いてください。

この夏のある休日の早朝、ぼくは秘密の湖でキャンプ用のテントを張って一日をのんびり過ごすために、飲食物とテントなどを詰めた50リットルサイズの大きなリュックを背負って森を抜けて湖に行った。その途中で仕事帰りのいたちのフクスケがうしろからリュックの上にちゃっかり飛び乗ってきた。フクスケは軽いんだけど、すでにずっしりしたリュックに乗っかられて全体の重みはずしんとこたえた。それに首に毛が当たるとかゆくて仕方がない。

「おい、降りろよ、フクちゃん。重たいんだよ」

「きょうは、仕事で随分くたびれたんだ。頼むよ」

「おまいの仕事は、ただネズミを捕まえて、いたちのチェーン店に売るだけじゃないか。一匹捕まえればその夜の仕事は終わりだって言ってたが・・・」

「きょうはひどい目にあっただ。猫の縄張りに入ったのが間違いだった。」

「犬の縄張りなら知ってるけど、猫も縄張りがあるんか？」

「あるさ。人間居住地ではずいぶん前に野良犬が駆除されて犬の縄張りはどうになくなって、今では猫の天国だ。きゃつらの縄張りはいたるところにあるさ。」

「なるほど」

「人間の甘やかashiで猫どもは今ではほとんどねずみを捕らなくなっただけに、縄張りだけはしっかり守ってやがるんだ。」

「そうだな、近頃は公園なんかで愛猫家が野良猫にもえさをやってるからな。・・・それで猫に負けるんか、おまえらは？」

「一匹同士なら負けない。ただ猫も我々もお互いけんかすることはなくなった。つまり力が同じくらいだから、いったん一対一でけんかを始めると勝負がなかなかつかずどちらも大怪我をする。そして勝ったとしてもねずみ一匹の取り分だから合わない。しかもたいていけんかが終わる頃にはネズ公のやつはトンずらしている。だからばかばかしいので、いたちと猫はずいぶん昔からけんかをしないんだ。」

「なるほど」

「ただ猫の縄張りの中では話は別だ。やつらはたいてい一匹で行動するが、縄張りに関しては仲間意識があって、それを守るためには連合軍を作るんだ。だからこちらに勝ち目はない」

「それできょうはどうしてきゃつらの縄張りに入っちゃったんだ。飛んで火にいる夏の虫たあおまえのことだ」

「いや、まあ聞け。おれが目をつけたネズ公のやつが、猫の縄なりに逃げ込んだんだ。それを追っかけてつい深入りしてしまった。そしてそのチュー公は猫に助けを求めたってわけだ」

「ねずみも変わったものだね。猫に助けを求めるとは」

「そこだ。近頃のネズ公どもは、これをよくやるんだ。猫の縄なりが安全な避難地帯だと気づいたらしく、その安全地帯に逃げ込むことが多くなったんだ。」

「それじゃ仕事も大変になったんだ」

「だから一晩中かけて一匹も捕まらないことだってある。最近では仕事の後の昼寝をする時間がみじかくなってしまってよ・・・」ここで取ってつけたようにフクちゃんはおくびをした。

「で、きょうは猫とけんかをしたのか、けがはしてないようだけど？」

「けんかはしないさ。ただ猫の連合軍に囲まれてひともんちやくあったんだ。つまりおれは言ってやった。『おまえらは、ねずみを取りもしないくせに縄なりを守っているが、それはお前らがさげすんでいる犬と同じ行為じゃないか』ってね。」

「どういうことだい、その犬と同じ行為ってのは？」

「猫は動物のたくさん出てくるイソップ物語が大好きでね、その中でも一番好きなのが犬の意地の悪さを物語った『飼い葉おけの犬』の話だ。」

「おおあれか、なるほど。」

この話を知らない人のためにかいつまんで説明すると、一匹の犬が、飼い葉おけの中で昼寝をしていると、牛がやってきて、そのおけの中の干草を食べたいのでおけから出てくれと言ったら、その犬は自分では干草など食べもしないくせに、ワンワンほえて、その牛に干草を食べさせなかった、という話です。

フクちゃんは続けて言った。「犬にほえられていやな思いをしたことのない猫はまずいないので、犬の意地悪さをいましめたこの話は猫たちには大のお気に入り、猫の母さんたちは必ず子猫たちに語って聞かせているといううわさだ。」

「なるほど」

「それで、おれはニャン公らに言ってやった、『おまいらがネズミを大切な食べ物としているのなら縄張りもわかる。だけど人間に甘やかされてネズミを食べもしなくなったのに縄張りをしっかり守るのは、あの飼い葉おけでキャンキャンわめくワン公と同じじゃないか！おまいらと違って、俺たちイタチにとってはねずみは今でも大切な獲物なんだ』ってね」

「よく言った！フクちゃん」

「きゃつらは一瞬ひるんだ。特にチビたちは、不安そうな顔をボス猫に向けた。ところがこのボス猫、こいつは真っ白い毛並みをしていて神々（こうごう）しきがあるんだが、話す言葉は大違いだ。こいつがこう言った。

『おれたちの縄張り（にゃーばり）は何（にゃに）もネズミ捕りの独占のためのみにあるんじゃない。我らの崇拜する招き猫大明（みゃあ）神様に守られたこの縄張りは侵さざるべき神聖なものだ。それにおれたちが全くネズミを捕まえて食べなくなったにゃんてこたあにゃあ。好みが変わってもっとおいしいものを食べているだけだ。さて、この神聖な縄張りの中ではおれ様の許可なくいかなる仕事もしてはにゃんにゃい。許可を受けたものでも仕事で得たものの半分を、大明神様の祭司であるこのおれに納めるのだ。今では実はねず公たちは、猫の餌食（えじき）というよりは、チーズとかスルメとかおいしい酒をたくさん貢（みつ）いでくれる忠実なはたらきもの、文字通り忠孝（ちゅうこう）なのだ。ところがおみやあは伊タ公はそのかわいいねずみたちを捕らえて減らそうとする。それにおみやあは縄張りの中で捕まえても、一切おれさまには貢ぎ物なしだ。にゃら縄張りに入った伊タ公とチュー公のどちらに味方をすると思うね？わかりきったことじゃにゃあか。縄張りのボスには縄張りの中の住人の身の安全を守る義務もある。だから働き者のチュウ公を、おみやーらのようなよそ者から守るんだにゃ』

そこでおいらは言ってやったね。

『言い分はわかった。だけどきょうのネズミはお前の縄張りの住人じゃない。遠くからここまでおれに追いかけられて来て、ここに逃げ込んだんだ。そいつはおれの住んでいる森の住人で、町のいとこのチュウ公と組んでネズミ講まがいの商売を始めて、無知で貧しい動物たちからたくさんの富を巻き上げているんだ。だから天誅（てんちゆう）を下さねばならない。こいつをおまえの縄張りにかくまったりしてみろ、ここの猫たちはみんなあつという間に一文無しにされてしまうだろうよ。何しろ猫に小判って、あんたらはお金の価値をわかりやしなないんだから』

するとボス猫が口をはさんだ。

『おみやあの博学はわかった。しかしまあ黙って聞け。おみやさっきイソツプの話をしたが、同じイソツプでこういう話があるのを知っているだろう、「イタチとやすり」というんだ。まあ聞きな：一匹のいたちが、かじ屋の仕事場にしのびこんで、そこにあったヤスリをなめはじめました。なめていると甘味がしてくるからです。まもなく、ヤスリでこすられた舌から血がにじみ出てきました。ところがこのイタチは、それはヤスリの鉄さびがとけ出てきたものと思いこんで、そのままヤスリをペロペロなめつづけ、とうとう舌がぜんぶすり切れてなくなってしまいましたとき、おーしまいつ、へっへっへ』と言ったね。ひろし、お前この話を知ってたか。」

「知らないね」

「だろ？おれも知らなかった。たとえ知っていたとしても、きゃつがこれを何が言いたいがために引き合いに出したかやはりわからなかったろう。それでただでさえ小さな目を点にして、言葉に詰まっていると奴さんは言ったね。『べらべらしゃべるイタ公はしまいにやペロがなくなるってことよ。きょうは許してやる、早いところ行っちみゃーな』

それでおいらは、猫たちに大笑いされながら退却したわけだ」

「そりゃあ疲れるわな。おっ、そろそろお前のうちだ」

「ありがとよ」フクスケはぴよんと飛び降りて大木の下の穴に入っていった。そのうしろ姿はなんだか悲壮感が漂っていた。

ぼくは、ポケットから一握りのいりことトンビを出して、フクスケの巣の入口に置いて、「これでも食べて、元気を出せよ」と言った。話題にしなかったが、実はうわさで先日の山手線運動会で彼のチームはどべになったことも聞いていたのだ。

おしまい

photos:

amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro